



札幌市中央区にある本社のテレビ会議室で、苫小牧本店のスタッフと打ち合わせする松本さん

建設業の最前線は現場といえるのですが、いつの時代も縁の下の力持ちのように現場を支えてきた人たちがいます。総務や経理などの事務職はもちろんですが、「まだ形のないものを売る」営業もその一つ。男性が多い建設業界の中、数少ない女性で、営業を担当する菱中建設の松本彩子さんに会いに行ってきました。

秘書から営業に。転職に匹敵する異動を経験

札幌出身の松本さんは静修短期大学英語学科を卒業後、菱中建設に入社。役員秘書として採用され、札幌にある本社の秘書室に配属されました。入社から半年も経たないうちに人員体制などの状況変化で、秘書業務を中心にしながら、他部署の業務を兼務するようになります。もともと好奇心旺盛だった松本さん。業務に関連する資格の勉強を始め、宅地建物取引士や福祉住環境コーディネーターなどの資格も取得しました。

松本さんが営業部に配属されたのは10年ほど前。異動を打診された時は営業事務だろうと確認してみると、

返ってきた言葉は「普通の営業職」。営業部への異動は、転職に匹敵するほどの大きな変化です。就職活動時も営業職だけは避けてきただけあって、「営業職として働く自分の姿が想像できなかった」と言います。

一方で、建設業という男性主体の枠組みの中で、前を向いて明るく働いている5年先、10年先の自身の姿を思い描くことができずに悩み、閉塞感を感じていた頃でもありました。

そこでたどり着いた答えが、務まるか、務まらないかというネガティブな選択をするのではなく、やってみるか、やらずに終わるのかという考えでした。やってみて、駄目ならその時にまた考えようと決心し、営業職に飛び込むことになりました。

第一歩はお客様の信頼を得ること

当初から営業に出かけるときは、どこに行くにも一人。「上司は放牧主義でした」と笑う松本さん。「どうしようかと最初は戸惑いましたが、後で考えてみると

それがよかった。度胸が付きました」。当時の入札会場では、松本さん以外は全員男性という光景も珍しくありませんでした。

他社からだけでなく、社内でも「建設業で女性の営業職なんて」と不快感を示す態度や嘲笑を男性から向けられることもありました。しかし、そこでエールを送ってくれたのも、また男性の諸先輩でした。「例えば入札会場でたった一言力強く、『頑張れ』などとかけていただいた言葉にどんなに勇気づけられたか。本当に感謝しています」。建設業の懐の広さと、温かい人たちの存在を実感できるエピソードです。

この10年間でデジタルツールが積極的に活用されるようになるなど、建設業の営業環境も変化しています。「情報収集が営業の仕事の要だと思いますので、心がけていることは常にアンテナを立てておくこと。空き地に看板が出ていたら、何が建つのか、どれくらいの規模か、発注者と受注者はどこかなど、細かな情報を積み上げていくと、つながりのなかった点が線になることがあります」と言います。

建設業の営業は「まだ形のないものを売ること」と言う松本さん。だからこそ営業の基本であるお客さまの信頼を得ることは、とても大切です。そのため、常に清潔感のある身だしなみに気配りし、雑談力を磨いて、相手の目を見て誠意をもって話すことを心がけています。「建物を一つ建てるだけでも、一つの部署ではできません。まずは営業担当者が信頼を得て、そして社内の各部門と連携し、お客さまのご希望に応えることができるように一丸となって努力する。みんなで一つのものをつくるのが建設業」という言葉に、チームワークという建設業の醍醐味があることを教えられました。

女性が特別視されない業界に

2020年6月に創業から112年目を迎えた菱中建設。女性職員は1割ほどですが、2017年から3Kイメージの払しょくや安全衛生活動のマンネリ化を打破しようと、女性職員による現場パトロールを行っています。現場の技術者が気付かない、一般の人たちの視点で現



2018年8月に実施した女性パトロールの様子。左端が松本さん

場をチェックし改善のアイデアを提案しています。これまでトイレや資材置き場、歩行者通路の区分けなど、厳しい指摘を行い、劇的に改善した現場もあります。

また、松本さんは建設業で働く女性の課題解決などを目的に発足した「建設どさん娘の会」の会員で、その一員として、2020年5月に札幌市が策定した「さっぽろ建設産業活性化プラン」の検討委員も務めました。

近年、女性技術者への関心が高まっていますが、建設業には事務職など現場を支えている女性もいます。「ある現場見学会に参加したとき、将来の建設業を担う若い世代の方が『女性の事務職はまるで透明人間のようになっている気がする』と、隣でポツリと言った一言が心に残っていて……。現場を支えている方たちの声や置かれている状況を少しでも代弁できれば」と引き受けたそうです。

建設産業を活性化させるために“女性活躍”や“女性が輝く”という言葉が聞かれるようになりましたが、「苦手なんです」と松本さん。あえて女性と主張しなくてもいい社会であることが、真に女性が働きやすい環境になったといえるのでしょうか。

入社から25年が過ぎ、「私たちを取り巻く環境は、当時では想像できなかった変化があります。さらに25年後も、きっと、今では想像できない変化が建設業界に起きていることでしょう。女性がマイノリティではなく、普通に働ける業界になってほしい。私の仕事も、そのちょっとした足がかりになれば、これまでとはげまし、勇気づけ、時には厳しく指導してくださった先輩たちへの恩返しになるのではないかと思います」と、飾らない思いを語ってくれました。